

ーツアーでの体験がきっかけになった。
私は、小西さんの講座の後も何度かESD
SDGsに触れる機会があり、「高校生の自
分にできることは何だろう」と考えてきた。
実際にカンボジアを訪れて、SDGsのす
べての目標を達成することの大切さを感じた
カンボジアには二十年以上にわたる内戦の影
響で、教育制度が崩壊したという歴史がある
教師をはじめとする知識人は虐殺され、学校
もなくなっていた。そんな過去があるカンボジア
では、今でも小学校に通えない子どもたちが
いるし、小学校の数が少ないため、学校は二
部制や三部制をとっている。ユネスコが「寺
子屋運動」を展開し、小学校に通えなかった
子どもたちや大人たちを対象にした寺子屋や
識字クラスを開いているが、その環境は勉強
する人々にとって必ずしも快適な環境ではな
かったように感じる。例えば、若いときに内
戦を経験し学校に通えなかった大人たちが通
う識字クラスは、夜に開講されている。教室

には小さな電球が二つあるだけで、教室の後ろのほうは手元も見えないほど薄暗かった。私は、カンボジアに行つてSDGsの十七つの目標の大切さを学んだ。それは一つ一つがとても重要で、一つとして取りこぼしてはいけない。すべてを解決しないと何も解決しない、ということを強く実感した。寺子屋を例にして、いくら教育の質を向上しても、その日食べることもままならない状況では質の高い教育を受けることはできない。そして、寺子屋ではそんな子どもたちのためにさまざまにサポートが行われていた。それを感じたのは、寺子屋に通う学習者の女の子の家を訪れる機会があった時だ。彼女は木を組んで建てた高床式の家に住み、家の周りには痩せた鶏や牛が自由に歩き回っていた。彼女は午前中学校で勉強し、お昼ごろ帰宅すると母親の仕事を手伝って焼きバナナというお菓子を作って売る仕事をしていた。食事の栄養バランスがなかなか取りにくいらしく、子どもたち

はとても小さかった。実際、私は学習者の女の子を八歳くらいだと思っていたが、十三歳だった。発育の悪さに驚いた。

そんな子どもたちのため、例えば寺子屋では年に2回ほど栄養のある食事を提供し、食について考えるきっかけを作っている。また文字を学ぶ上で衛生面での向上や医療へのアクセス増加を目的に、衛生に関する文章を読むなど、命を守る取り組みも行われている。ほかにも識字クラスでDVについて学んだ学習者は妻への暴力をやめるようになったという事例もあるそうだ。

私はカンボジアでSDGsのキーワードとして挙げられている「誰一人取り残さない」ことの大切さを感じ、カンボジアに行つてSDGsでの目標と現実の差を目の当たりにした。そして、自分にできることを考えると、それは「伝えていくこと」「仲間を増やすこと」「だと思つた。

私は自分が通つていた幼稚園に行き、来年

の四月から小学校に通う年長の子どもたちに
カンボジアという国について話した。みんな
と同じようには小学校に通えない子どもたち
がいることを写真を見せて伝えた。そして書
き損じはがき運動という、カンボジアの子ど
もたちを日本から応援する方法があることを
伝えた。幼稚園の子どもたちは、とても興味
深そうに話を聞いてくれた。そして、家に帰
って家族に今日聞いた話を伝えてくれること
書き損じはがきを集めることを約束してくれ
た。世界にいる子どもたちを知り、思
いを寄せる小さな仲間ができた。その子たち
と踏み出すそんな小さな一歩一歩が、SDG
sの十七の目標を少しずつ解決し、少しずつ
世界をよりよく変えていくのだと思う。これ
からも、自分が体験したことを岡山から発信
し、身近にいる仲間を増やし、世界を変えて
いける生き方ができるように努力したい。教
育の力で世界を変えろという大きな夢を叶え
るために。